
Spring has come.

こつぷ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S p r i n g h a s c o m e .

【Nコード】

N 7 5 2 0 L

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

卒業式の次の日、彼女の姿は元に戻る。僕の知らない大人な彼女。受け止められず、受け止めきれず。その日が来るのが、怖かった。および2008年度宮野の日企画参加作品およびCandlelight閉鎖に伴い移行作品。 光哀です。

前編

桜舞う4月。

あの大きな桜の木の下で、僕らは写真を撮った。

入学式の日、新しいランドセルを背負って、浮き足立った気持ちでいる元太くん、歩美ちゃん、そして僕の3人。

春の嵐というような突風がぴゅうと3人を包み込み、桜の雨が降った。

写真に写るのは、そんな桜が舞い散る中で撮られた、ちよっとおどけたような表情の3人。

あれから6年。また、今年も新しい春が来る。
別れと出会いを引き連れて。

S p r i n g h a s c o m e .

朝、目覚めて僕はくしゃみを一つする。

3月中旬とは思えないこの寒さ。

まだ覚め切れぬ頭で、辺りを見渡し、壁にかかっているブレザーを見て、そうして僕は今日のことを思い出す。

今日は3月18日。

僕が長年……。6年間通っていた帝丹小学校の卒業式だ。

新調されたブレザーに袖を通しながらまたくしゃみをして、僕は今頃スカートに足を通している彼女のことを思った。

そうして、胸をきゅっとさせる。

切ない、辛い、痛い、胸の奥。

とうとうこの日が来てしまった。

僕は大きく溜息をつく。とても大きく、深いもの。

この卒業式を最後に、僕は大切な仲間と、また離れ離れにならなくてはならなかった。

その人の名前は、灰原哀。

僕の、単なる憧れだけでは収まりきれない、そんな大切な人。

多分世界で一番大切な人。けど、思いはきつと届かない。そんな遠い人。

彼女が明日からどこにいくのか、僕は既に知っていた。

3ヶ月前に一足先に僕らの元からいなくなってしまった僕のもう一人の大切な仲間から、旅立つ前にちゃんと聞かされていたから、彼が、彼らが”本来”の彼らに戻ることも、2人からちゃんと教えてもらったから。

6年間一緒にいた仲間が、親友だと思っていた人が、実は”本来ならば存在し得なかった”2人だったなんて、心の中ではわかってはいたのかもしれないけど、本当ならば知りたくなかった。このままずっと続くものだと思っていた。

中学で、たとえクラスが違ってても、一緒にまたキャンプや節目ごとにパーティなんてして騒いだりできると思っていた。

なのに、それができなくなると知ってしまった時の絶望感。

あの時の気持ちは、思い出しても涙が零れる。

「工藤新一」「宮野志保」。

形は変わっても、中身は同じ。解ろうとしても、やっぱり許せなくて。

同じように進むものだと思っていた人は、もう遠くの方へ、見えない場所へ行ってしまう気がして。

思わず言ってしまった、あの時。

『元になんか、戻らないで…ください。僕の…僕らの前に、…
いて、ください』

涙で顔をぐしゃぐしゃにさせて。
でも、そうなっちゃいけないことだって、ホントは知っていた。
知っていたけど、そう言ってしまった。

そうして、認めることができないまま。彼と口を利くこともないまま、彼は…

江戸川コナンくんは、工藤新一さんに戻っていった。
その後顔もあわせることもなく、僕らの前に顔を見せることもなく。
気がつけば3月になって。

そして、明日、彼女も。

ずっと想いを寄せていた灰原さんも。

僕の前から永遠に、消えてしまう――。

たとえ、それが『宮野志保』として形を変えたただけだったとしても。

僕の大好きな『灰原さん』は、永遠に　　。

「卒業生、退場」

式が終えて、すすり泣く声が聞こえる中、『3月9日』の音楽をBGMが流れはじめる。

退場の音楽。

先ほどまで僕がちらちら見ていたのは、勿論、今日で最後になる灰原さん。その姿に、僕は泣きそうになる。

悔しいほど、悲しいほど真っ直ぐ前を向いて、凜としていて。次行く未来に期待に胸膨らませているように。

あの時の、彼がそうだったように。彼女も。・・・灰原さんまで。

どうして。

どうして、僕らを置いていくのか。

どうして、元に戻らなくちゃならないのか。

何で今、なのか。

何であと6年……。せめてあと3年待ってくれないのか。

責める気持ちが一方で。これで最後だとわかっているのに、何も言えなくて、僕は歯を食いしばって退場の花道と呼ばれる道を渡った。

彼が、彼女が遠くへ行くわけじゃない。
変わらず近所にいてくれる。

けど、この3ヶ月。彼女より先に行ってしまった彼はめったに姿を見ることがなくなった。

小学校にいる僕と、工藤新一としての空白の時間を取り戻し、探偵としての準備を始めている彼とじゃ生活リズムが違いすぎる。

会って話せるのかと言われたらもしかしたら話せないのかもしれない。準備がいるかもしれない。

ケンカ別れしたままだから、まだしこりみたいなのがあるかもしれない。

でも、彼が元に戻ると言わなければ、こうなることはなかったじゃないか。

同じように今までみたく一緒にいられたじゃないか。
思うことは、彼への恨みつらみ。

そしてそれが、灰原さんに向けられることが、怖い。

泣くのを必死に堪えながら、僕は未だパイプ椅子に座って身じろぎもせず、ただじつと前を向いている彼女をもう一度ちらりと見た。これが、最後の彼女の。『灰原哀』の最後になるような……。そんな気がして、一瞬にして目に焼き付けようとしていたのかも
しれない。

+
+
+

教室に戻ると、担任が既に教卓に立って、泣いていた。
1年生のときにお世話になった、小林先生。6年生になって、

僕たちの担任になって。

先生にとつては、この小学校に赴任して初めての生徒が僕たちの代だから、よけい思い入れが深いのだろう。

わかつているけれど、そんな先生につられそうで、僕はさっと目を逸らした。目を逸らしても、どこも誰も彼も、みんな同じような表情をしているんだけど。

5人の中でただ一人、僕と同じクラスになった歩美ちゃんと目が合つて、彼女は少し寂しそうに、にこりと笑った。彼女もまた、あのときからずっと悩んで悩んで悩み詰めていたのだろう。でも彼女は、僕と違って次の日からは普通に話しかけていたけれど。

「まあた、そんな顔して」

「そんな顔つて、どんな顔ですか？」

「涙でぐちゃぐちゃ」

「まだ、泣いてませんよ」

通り際、囁くようにそう言った歩美ちゃんに、僕は足を止め、拗ねたような表情で彼女を軽く睨んだ。いや、睨んだ、というより、顔を歪ませただけだったけど。どうしても変に力を込める。表情がうまく操作できない。油断したら泣き顔になんて、なり　そうで。今まで我慢してたのにこんなところで泣きたくない。

「もう、終わっちゃうよ」

「解つてますよ」

解ってる。

君がどんなに彼を想って、彼女を大切にしていたか。
君がどんなに頑張って、全て受け止めることができたのか。

次の日の君は何もなかったかのように笑ってて。でも、そうじゃなくて。

「本当のことを言ってくれて、よかった」って笑ってた。
「最後に真実を伝えてくれて、よかった」って。

あの時も、君は強かった。

「…なんで送ってあげられないの？」

「え？」

「笑って送ってあげられないの？足を引っ張ろうとするの？本来の姿に戻るんだよ？元いた生活に戻るんだよ？それじゃ光彦くん、底なし沼から足をひっぱる人みたい…とっても、かつこ悪いよ？」

「…」

すごい言われようだ。何か言い返したくて、僕は歩美ちゃんをキッと睨み、歯を食いしばる。

解ってる。

でも、全ての人が、君みたいな人じゃないんだ。

そんな僕の気持ちを見越したような表情で、彼女はこう言った。

「信じてあげられないの？私たちのことを忘れちゃうって思う？」

「…え？」

「哀ちゃんやコナンくんが、元の姿に戻ったら、私たちのことを忘れて、というかこの6年間のことを『なかったこと』にしたい！って思うと思う？」

真剣な顔で、歩美ちゃんが僕を見つめていた。

「…それは思わない、ですけど。でも、でも…。何で今、なんですか？何で今、別れなくちゃならないんですか？僕らはずっと一緒だと思ってたのに…。ずっとずっと一緒だと思って」

「無理だよ、それは。…ずっとなんて絶対無理」

ハッとして、僕は彼女を見つめ直す。彼女は悲しそうに首を振っていた。

「あと3年もしたら、高校だって別々になるだろうし、大学だって。あんなに優れてる2人を誰もきつとほつとかないわ。どっかに留学して、私たちは置いてかれちゃう。きつと今までみたいにこうして会うことだって、元に戻らなくなつてなかったと思うよ？逆に、あの時、もしコナンくんたちにアメリカに転校するんだ」なんて言われたとしたら、ホントにそれでよかった？私はやだよ。

2人が近くにいることさえも気づかずに、時には疑ったり、まま

たウソを重ねられたり…。そんなことをされるよりは断然いい。逆に私たちに全てを話してくれたたってことは、それほど私たちが大事に思ってるからこそなんじゃないかな。姿形が変わっても、『江戸川コナン』『灰原哀』として、接してくれってことなんじゃないのかな？そうは、思えない？」

「……でも、一緒にいらなかったじゃないですか！…3ヶ月間、工藤さんは…。コナンくんは、僕たちのところへ来て、くれなかった」

八つ当たりだ。

僕は後にしてそう思う。でもあの時はそうは思えなかった。

僕の思いの丈を、全て、女の子に。そして同じ当事者の彼女にぶつけてしまっていた。

だけど、そんな僕の前でも、彼女は普段通りの表情で言葉を返してくれた。

「それは、光彦くんが扉を閉じてるからだよ。…少なくとも私には連絡してくれたよ？光彦くんのこともちろんと心配してたよ？コナ…新一さんは」

その言葉に、「え？」と驚いて僕は歩美ちゃんを見つめた。

歩美ちゃんは新一さんにもう、逢ってた？接触してた？

思わず、言葉を失くす僕に対して、彼女はずっと笑っていた。

とても穏やかな表情で。少しだけ恋をしているように頬を桜色に染めて。

「忙しい中でも、私たちの心配は必ずしてくれたよ？泣いてたら会いに来てくれたよ？コナンくんは、姿形が変わっても、コナンくんのままだったよ？」

そうか、だから。

だから、そんなに笑っていられるんだ、歩美ちゃんは。

「コナンくんじゃなくなって、寂しかったけど、でも新一さんを見てるだけで幸せになったよ。コナンくんにそっくりな笑顔で、笑われると、どきどきするし、同じようなことを言われると、嬉しかったり。蘭お姉さんと一緒にいる姿を見ると、胸が痛くなるけど、それでもちゃんと受け止められるし」

「…」

「哀ちゃんのところへ行つてあげて。明日にはいなくなるんだよ、『哀ちゃん』じゃなくなるんだよ。中身は同じでも。…もう見上げることしかできないんだよ？同じ目線で、言いたいこと、伝えてあげて。」

「…ね？哀ちゃんは待つてるよ？勿論、コナンくんも。ちゃんと認めてくれるまで、待つてるよ？だから、ね、お願い」

「…はい」

少しの間のあと、僕はいつのまにか頷いていた。まるで魔法にかかったようにボンヤリとした頭の中、それでいて心のどこかがぽかぽかと温かくなるのを感じて。ちょっとした希望が体中から僅かに、少し

ずつであるけれど確かに沸いてきて。少しだけ、口元が緩んだ。

そうして一滴。熱いものが零れて、床に落ちた。

「円谷くん？もう、いいかしら？」

「え？」

気がつけば全てのクラスメートが自分の席についていて、申し訳なさそうに小林先生が僕らを見ている。クラスの目線も僕らに集中していて。なのに、皆なみだ目のままで。

僕は慌てて自分の席に戻った。

机の上には、卒業証書。そうして、1輪のピンク色のカーネーションと、思い出の詰まった卒業アルバム。

僕が視線を落とし、また教卓へと視線を戻すと、先生が僕の動きが終わるのを待っているようで。僕は慌てて、大丈夫です、と頷いて見せた。それを見届けた上で、

「さあ、最後のHRをはじめましょう」

先生の震えた声が、教室中に響き渡った。

後編

校舎のすぐ脇に立つ、桜の木。

その蕾は少し、膨らみ始めて、あと1週間ほどで開き始めるであろう春の予感を感じていた。

そうして僕は、その下で、卒業式が終わった、その帰りに。一人、ピリピリと凍えるような寒さの中、佇んでいた。

待っている相手はただ一人。

灰原さんだ。無論、歩美ちゃんに促されたこともあって。勇気づけられたこともあって。

彼女を呼び出すなんて初めてで。それだけでも緊張するのにこれから言おうとしている内容のことを考えると、僕はさらに落ち着かなくなる。

かさり。後方から音がして、僕はびくりと体を動かせ、おそるおそる振り返った。

待ち人、きたり。

彼女がちよつとだけぎこちなく笑って、立っていた。

「ごめんなさい、待たせたかしら・・・？」

「いえっ、全然・・・」

よく似合う紺のワンピース。白色のワンピースを選んだ歩美ちゃんとは色違いのそれ。

正面からちゃんとじっくり見るのは初めてで、そうして彼女と話すことも久しぶりで。

僕は一気に緊張を高鳴らせた。

「・・・それで？話って？・・・まあ聞かなくても、大体解るけど」

僅かに口元を緩ませて、彼女は僕から背中を向ける。

その背中はとても、寂しげだ。・・・あれから3ヶ月、僕と彼女は話すことをしなかった。

でも、それでもずっと灰原さんのことを好きだったから。・・・どんなに喋れなくなつて、背中を向けていたとしたって、彼女の気持ちは伝わってくる。だから僕は勇気を出して真っ先に伝えた。

「ごめんなさい」

「・・・え？」

彼女が驚いて振り返ったとき、僕は深く深くお辞儀をしていた。卒業式のあの45度のお辞儀よりももっと深く深く。彼女の表情が見えないくらいに、深く。

「僕が子供で、ごめんなさい。かつこ悪くて、コナンさんと君のことを祝ってあげられなくて、

ごめんなさい。笑って送り出してあげられなくて、ごめんなさい。ずっとおしゃべりできなくて、

ごめんなさい。でも、僕は、君が・・・」

すう、と息を吸う。

「君が好きでした。好きで好きでしかたなかった。この6年間、ずっと。だから・・・だから」

涙が零れる、一滴、二雫。

「これからも好きでいて、いいですか？姿形が変わっても、ずっと見続けていてもいい、ですか？」

このまま、変わらぬ気持ちで、いいですか？

君がどんなに誰かを想っていても、僕はその笑顔を見続けてもいいですか――？

それが、たとえ報われない恋だとしても。

「円谷くん……」

しばしの間のあと、呟かれた言葉。

「ばかね……」なんて呟いて。

「私よりも素敵な人、沢山いるわよ？」

「灰原さんじゃなきゃ、ダメなんです……。姿形が変わっても、今まで通りでいいから。」

ずっと僕が君の傍にいたいんです……」

”姿形が変わっても”

”同じ目線に立てなくても”

「僕は、君が、好きなんです」

いや、それはただ単に現在のことであつて。

もしかしたら、あと5年たつたら変わるかもしれない。

17歳の僕と、28歳の『志保』さんなんて、素敵な関係じゃないか。

もしかしたら、また同じ歩幅で歩ける日が来るかもしれない。

だから、それまで。いや、ずっと、これからも。

「僕の、傍にいてください」

灰原さんが好きで好きで仕方ないんです。

君の傍に、いさせてください。君の笑顔を見つめさせてください。

「すっごい告白ね。・・・未だかつてそんなのなかったわ」

ずっとお辞儀をし続けた姿勢のままで、頭上で聞かれた灰原さんの含み笑い。そうして、

そつと肩を叩かれて、顔をあげるようにと促された。

おそろおそろ確かめた彼女の顔は、にっこり笑つてた。

「傍にいただけでいいの？」

「えっ・・・！？いや、あの、その・・・できればその先も・・・

・今は無理かもしれないですが、その・・・」

「皺が増える様子をじっくり観察されるの？・・・それはイヤ

よ？」

「いや、あの……。灰原さんは……。絶対皺なんてできませんから！！」

そう真っ赤になって言い切つて。暫しの沈黙の後、ぷつと彼女は吹き出した。

「ありがとう。好きっていう気持ちはいただいておくわ。気持ちちはきつと変わるだろうし。

私は今の貴方を受け止めることはできないし。……。でも」

一瞬、彼女は言葉を止める。

「それでも貴方の言葉、すごく嬉しかったわ。ありがとう。私の方こそ、ずっと傍にいさせてね。

てね。今まで通り、みんなの傍にいて、できるだけ同じ時間を沢山共有させてね。ずっと……。傍にいさせてね。……。私は、貴方たちが好きだから。だいすきだから。」

”好き”

その言葉に一瞬、体中が熱くなる。僕一人が好きだと言ってくれたわけでもないのに。それでも。

とっても嬉しくて、くしゃりと表情を綻ばせた。

+
+
+

ちらり、ちらり。

冷たいそれは頭上から予告なく突然舞い降りた。
それは、3月の季節外れの雪片。

「あ」

頬に掠めるその雪片はすぐに溶けてなくなる。

「卒業式に降るなんて珍しいわね。降るかもとは言っていたけれど」

「そうですね。．．．なんだか白い桜の花びらみたいで、綺麗ですね。こうして見ると」

「あら、そうね．．．」

僕は傘もないのに肩を並べてばんやりと見つめていた。白く頭上からちらちらと

振り続けるそれを見ながら、僕は6年前の入学式のことを思い出していた。

あのとき、僕らの上に舞い降りたのは雪じゃなくて、桜。ピンクのひらひらとした花びらがとても綺麗で。

また同じような体験をしている自分に気づき、思わず笑みがこぼれる。

入学式のことなんて、思い出すこともなかったのに。

「ねえ、灰原さん。．．．今度、4月になったらどこかに集まって、みんなでお花見に行きましょうよ」

「そうね。みんなで．．．」

嬉しそうに灰原さんが微笑む。
微笑むから、僕も嬉しくなつて。

それから、彼女の肩に雪片が残っているのに気づいて、そっと
払ってあげた。

明日、彼女は元の姿に戻る。

4月になったら、中学校の桜の木の下を、あの日と同じように
潜る3人がいる。

同じところには通えないけれど、コナンくんも、灰原さんも、6
年前のあの時とは違って、

ちゃんと傍にいてくれるから。

いつか、社会人になって。彼らに追いつくことができるかもしれないから。

そして、その時にきつと。

< f i f i
> . n . n

S p r i n g h a s c o m e .

後編（後書き）

この話は、2008年度光哀企画に応募させていただいたものです。

この、解毒剤完成してからというテーマはよく書いているのですが、今回は、『コナンが戻り、哀も戻る編』を書いてみました。

粉雪では、『コナンは戻り、哀は戻らない』ver
またあした・・・、ほろにが、GOSZIPなどでは、『二人とも
元に戻らない』

さくらの花がさく頃では、『二人はもとに戻る、二人相思相愛』
雨と老女では、『二人は元に戻るが、新一は蘭ちゃんと付き合っ
てる。志保は変わらず新ちゃんが気になってる』

Ifでは、『コナンは戻り、哀は戻らない。なおかつコナンは新一
先生となって哀ちゃんラバー・・・』

・・・いろいろありますね。

考えれば考えるほど楽しくなってきました。

今回の話では、みったんは哀ちゃんにこう申し出ました。実は似た
ようなカンジに、みったんが哀ちゃんに告白するシーンがあります。
だけど、内容的には・・・。

さあ、どうだったでしょう（笑）。わかる人にはわかるはず（笑）。

ここまでお読みいただきまして、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7520/>

Spring has come.

2010年10月8日22時16分発行